

フクシマ・レヴィジテッド

河本英夫（文学部）

キーワード：復興、自己組織化、負の遺産、南相馬市

2015年3月12日朝、新幹線で再度フクシマ入りをした。福島駅ではボタンのような大粒の雪が舞っていた。少しでも気温が下がれば、ただちに雪になる気象である。大気はほぼ湿度に満ちている。前日には、「3月11」日を祈念して、福島各地では、大小の多くの追悼集会が行われた。5年目の春である。4年の歳月が人間の時間である限り、何もしていないことはできない。何もしていないことはむしろ忘却の別名である。おのずと進行する忘却を、風化という。それはまさにそれじたい、風に成ることである。風になることを恐れる気持ちもある、あるいは風になってしまわなければならないとも思う。たとえ風になっても痕跡はある。

時の流れは否応がない。物事の推移に、それぞれの人の加齢も加担する。過ぎ去ったあとの時間の推移のなかでの思いを「理解」という。理解とは、手遅れになったものの思い出のことであり、そこにはいくぶんか流れ去ったものへの思いの自己正当化も含まれる。事態をわかることのなかにおのずと含まれてしまう「言い訳」と「自己正当化」は、どこか理解そのものの座りの悪さを引き起こしてしまう。大震災とは、どのように長引こうと一つの「出来事」であり、ある意味で「瞬間」である。その瞬間は、過ぎ去っていくことの「理解」にも、理解をつうじた未来への「投企」にも解消されはしない。出来事とは、どこまでも配置をあたえることのできない不連続点である。どのように時間が過ぎ去ろうと、いわば「何一つ流れない」思いがある。

2015年3.11追悼の会場の一つでは、3名の追悼講演が行われ、そのうちの一名は母を亡くした女子高校生だった。ただたんに母を失ったのではない。津波に流され、必死でもがいているとき、さらに下の方から自分の足を引っばるものがある。見ると下から母が足を引っ張っている。瓦礫に挟まれて、自分では身動きがとれない。助けてくれと、当時中学生だった自分の娘に必死で懇願したのである。女子高校生は、ともかくもなんとかしようとしたが、そのままでは自分も死んでしまうと強く感じ、母を置き去りにして、自分だけ生き延びたと言う。

どのように言葉で語ろうと、またどのような思いを込めようと、こうした事態は一生抱え続ける以外にはない。語れば局面が変わるような事態ではない。だが何らかのかたちで語るよりない。淡々と語ろうが、激して語ろうが、それらはすべて測定誤差以内に入ってしまう。それでも語らなければならない。そうした事象がある。どのように復興しても、どのように現地の姿が変わろうとも、そのことによっては何一つ変化のないような事象がある。そしてその事象の強さがある。

これは極端な事例に思えるかもしれない。だが母親でなくても、兄弟であっても、親しい知り合い

であっても、そばにいる者を見捨ててきた現実に大きな違いはない。仮に助けようとして、二人とも死ぬ場合、二人とも助かる場合、相手だけ生き延びて自分が死ぬ場合のように、さまざまな思いが経巡った月日があったに違いない。いずれもありうることである。現にいまこのようであることは、どのように理由づけしようと、本人にとってもどこにもって行き場のない思いを残してしまう。どのように自分の行為のやむなさを自分自身に説得しようと、それで区切りが付くわけではない。こうしたどうしようもなさの一步先に行くことは困難である。また一步先に行くことが自分自身にとってもよいことなのか、判断のつかない事象がある。そうした思いの一端をようやく語るができるようになるまでに、この4年が必要だったと思われる。前日のそうした語りを思い起こしながら、フクシマに入った。そして雪である。

こうした場面で、事象のもとにより淡々とした語りはないのかという思いはつねに心のどこかに残ってしまう。激した誇大さとも、諦めにも似た断念とも異なるかたちの感情と感性の動かし方はないのかとも思う。たとえば以下のような文章である。

過去とはおそらく絶対の慰めである。時間のおかげで私たちは身を退いてものごとをながめやることができるのであって、そのとき、自分の心配事や苦悩が対象に、たんなる対象になる。この大航海はやむことがなく、すべてを回復し、わたしたちを運んで行ってくれるが、そこには解放の約束が、いや、約束以上のものがある。この持続的な運動の思い出の当たりを軽くしてくれる。絶望は過去に居座ろうとするが、そうはいかない。過去を再考することと過去に別れを告げることは、人生の平衡そのものだ。それは、身を退きつつ自分を再発見することだ。

(アラン『芸術論 20 講』長谷川宏訳、光文社、97 - 98 頁)

一般にはこの優れた哲学的エッセイストの語るとおりである。ただし特異な偶然によって、修復不可能なほど、人生の均衡が逸脱してしまうことがある。そしてそこから前に進むためには、時間経験とは異なる非常時の覚悟と踏み出しが必要となる。

1 復興の NPO

2014年3月にフクシマに入ったとき、震災からすでに3年という時の長さ、あまりにも手のつかないままだ時だけが過ぎ行く遅々たる歩みに、気持ちのもっていきようがなかった。今回1年ぶりにフクシマに入ってみて、復興の本質はタイムラグであることがくっきりとしてきた。南相馬市の原町の海岸沿いの農地には、1年前には背面飛びのような姿の車が到る所に散らばっていた。農業を再開するという開始前の条件さえ整っていなかった。今回車で横を通ると、海岸沿いに堤防ができかかっていた。全線の8割ほどの堤防が出来あがっていた。だが海水の浸かった耕作地は、ほとんど手付かずである。

海水に浸かった土地を回復することは容易ではない。綿のような塩分に強い作物を植えて、数年間かけて耕作地に戻す作業が必要になる。そこまで手間暇かけて耕作を再開する段取りにはならないのであろう。回復とは、最も通りやすい水路を見出すようなものであり、そのため先送りされるプロセスは、いつまで経っても先送りされ続ける。この先送りの日常のなかで、気にも留めなくなった事象が「震災の風化」である。

登録上の「農地」である限り、容易には「農地」を回復することはできない。ここにも日本に特有の「農地のマジック」というべきものがある。農地を別の用途に組み替えていくためには、各地の「農業委員会」を通さねばならず、簡単には進まない。それが「岩盤規制」と呼ばれるものの一部である。農は本来、光、水、大地の滋力を最大限に引き出す営みである。さらにそこに経済活動を行う仕組みが組み込まれると「農業」となる。この農業の流通、金融、企画その他一切を仕切っているのが、農協である。農協は巨大な金融機関でもある。三菱東京 UFJ の資金量とおなじぐらいの資金を持っており、各種補助金の受け皿にもなっていて、多くの法律で守られている。通常は農地については、農協が動かなければ何も始まらないのが実情である。この巨大な資金のごく一部、すなわち 1%程度が農業用の資金と成っている。因みにそれ以外の 3 割は、住宅用の貸付であり、残りの大半は米国債で運用されているという。

南相馬市のはずれの農地の一部に、一般社団法人「福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会」の設置した、ハウス栽培とソーラーパネルがあった。この事実は『日経エコロジー』の記事で所在を知り、事業体に、事前に訪問とインタビューを申し入れてあった。

その中央には、プレハブの事務所が建てられていた。12 畳ほどの研修室と生活用の雑務室でできている。この会の代表が半谷栄寿さんである。半谷さんは東電の元役員であり、震災後ただちに救援物資の搬入の作業を開始した。もともと都内でも古紙回収の環境 NPO 代表も務めており、震災を機会に救援活動を開始したのである。「南相馬がんばれ」「福島がんばれ」の旗を立てて、トラック輸送した。半谷さんの父も、福島県のある市での行政の長を務めており、公益的活動に幼少期からなじんでいたともいえる。



震災後、半谷さんの企画したことは、復興の一つのモデルケースになる。フクシマの現状で、どのように起業していくのか、どのようにして起業家を育てるのか。手をこまねいていたのでは何も始まらないのであり、誰かが何かをやってみせることが現在の日本にとって一つのモデルになるように、実行して見せることが必要なのである。そこで復興期の支援のあり方として、物を届けることから、「仕組み」を示すこと、またそれを経験するための場所を設定することを課題設定してこうした「社団法人」を開始したのである。

ただし東電の元役員の肩書と顔のネットワークはかなり強力で、この社団法人は、初年度多くの企業から寄付を受け、かつ企業研修を請け負っている。アイデアを出し、復興支援金の有効な活用の仕組みを見出し、そこで事業を行ってみせるのである。

まず復興交付金(1億1千万)を活用する。次に津波被災農地を市有化してもらう。そこを農地転用するのである。それ以外に東芝 CSR から出資金1億円を出してもらう。原発の電気系統は東芝が全面管理しており、付き合いは長いと思える。実は韓国の原発の電気系統の特許は、東芝がもっている。そのため東芝から機密情報を持ち出そうとして、事件が起きたことがある。また農水省の補助金を1億弱受ける。ここまでの作業を行って、2013年3月に「南相馬ソーラー・アグリパーク」が出来あがった。それじたいが体験型のテーマパークである。そして一方では、復興を担う地元人材の育成を行い、他方では地元農業法人が業務を開始し、生産物はヨーベルマークへの全量出荷の仕組みを作っている。

この仕組みは、一方では起業家を育成し、他方では起業の支援を行うことで、起業ネットワークを作り出すことである。起業家の育成では、学校教育では容易には届かない起業の具体的な場所を提供することを企てて、恒常的に研修を行い、他方では実際にさまざまな起業をやってみせるのである。こうした仕組みを半谷さんは、「憧れの連鎖」と呼んでいた。ここまでやらなければモデルケースにはならないのであろう。

現在ではハウス栽培トマトの会社を立ち上げて、南相馬市がかつて生産していたトマト総量の半分まで生産できるようにした、ということであった。カゴメと提携して、トマト全量を購入してもらう契約にしたということだった。

こうした復興のシステムは、誰かが開始しなければ、作動していかない。そしてひとたび作動を開始しても、なお継続し続けなければ展開可能性がなくなる。これは実際に、復興ネットワークの自己組織化を狙う仕組みとして、歴史に残りそうな企てである。

2 6号全線開通

今回の視察の課題の一つは、海岸沿いの国道6号を南相馬市から富岡町まで通りぬけることである。半年前までは、放射線量が高いという理由で、国道6号の一部は閉鎖されていた。警察が物々しい警部体制を敷き、それを振り切って通行すれば、立派な公務執行妨害である。6号線の全線開通は

ニュースにもなったが、通行する車は停車禁止でかつ窓を開けてはいけない。その地域一帯は、当然のことだが「帰宅困難地域」に指定されており、民家にも商店にも人の気配はまったくない。それだけではなく動物の気配もない。カラスさえ飛んでいない。

海岸沿いに向かう6号線と直交した道路を封鎖するための警備員が、時として立っているぐらいである。所在なさそうに立っている警備員は、放射能を浴びないのだろうか。そんなことを心配しても始まらないのだが、これほど多くの人々が亡くなった震災の後なのだから、いずれにしろそれも「命掛け」の仕事である。

富岡の名所の桜並木を通り抜けて、富岡町の流されてしまった駅舎に出た。津波で残っていた駅舎の鉄骨もすでに撤去され、駅といっても、コンクリートのホームと錆びた鉄道が残っているばかりである。この地区も居住者の気配はまったくないが、見学者はかなりの数にのぼっている。住む人がいないのだから、津波で破壊された家屋はそのままである。家屋の維持は、そこに住まうことである。それがもっとも家屋が長持ちすることである。食器を長もちさせるためには、それを使うことである。使わない道具はある意味で「語義矛盾」である。

駅前のこの家にもはや住民は戻る可能性はなく、また津波による破壊部分を取り壊して、別様に活用する可能性もない。つまり取り壊して整理することもできない。それが見学の対象となり、震災の記録となる。



富岡駅前

記録とは、再生されないことの別名かとも思う。過去の記録は再編され、多くが不明になってしまう。進化論の場合の「失われた輪」のようなもので、繰り返し再生するものは、特殊な条件がなければ、「過去」として記録に留まることはない。自己を再編し、みずからを組み替え、過去の痕跡を消していくことは、生命の共通の特徴である。生命とは、再編のプロセスのさなかで、みずからの痕跡を自分自身へと組み込むことである。構造部材の上で、超安定期にはいる特殊な時期だけが、記録に残

る。記録とは例外的な安定期のことである。こうした建物も、記念碑として特殊保存するのなければ、住む人のいなくなったあばら家と同じになる。

富岡町駅のホームから海岸までは数百メートルである。ホームの向こうに海が見える。それだけではない。その中間に、膨大な量の汚染土壌が積みあがっている。一つ一つ黒の袋に詰めて、数万、数十万という規模で積みあがっている。中間貯蔵施設として活用する場所の一つかもしれない。小口で汚染土壌を各地に残したままであれば、その土地には簡単に立ち入ることは出来ない。

放射能事故の痕跡を消すためには、汚染土壌を運び去り、どこかに集積して、人目に付かないようにしなければならない。それが中間貯蔵施設である。そしてその場所は「帰宅困難地域」から選ばれる。その一つが富岡町である。そこでさらに除染し、後に最終処分場に送られるという計画である。しかしおそらく最終処分場を引き受けるところはないと思える。いったいできるだけ遠ざけたいと思っている汚染土壌を、自分の近くに引き受けるものはあるのだろうか。常識的にはいつまで経っても最終処分場は決まらない。そうすると中間貯蔵施設は、永遠に「中間」貯蔵施設という名前のまま、実質的に最終処分場となる。最終処分場探しは、延々と続く。つまりネヴァーランドである。

汚染の半減期は、個々人の一生の時間にとっては、どうにも融通が利かないほどの長さである。一生の時間が測定誤差にしかならないような事象がある。待てば何とかなる、時間を置けばなんとかなる、というのは、すでに全面的に「人間化された」時間のことである。この人間化された時間の外で、経験をどのように動かしたらよいか。解答のない問いを、そのことを承知の上で、なお考え続けることに近いのだろうか。それともおのずと忘れることのありがたさを求めて、日々の雑事に埋没することが得策なのか。



富岡駅と海の間

富岡町には全国有数の桜並木がある。帰宅困難地区だから、一切手入れは行われてはいない。それでも一月後の4月半ばの開花に向けて、樹脂の下は全身で桜色に染まっているに違いない。2015年の開花の時期は、観光バスを仕立てて、バスのなかで花見をやるようである。桜並木の周辺全域は、

いまだ十分な除染は行われてはいない。除染が行われたのは、幹線道路周辺だけである。下りて歩くという選択肢のない花見は、やはり奇妙なものである。

フクシマ第一原発の廃炉作業前線基地である「J・ヴィレッジ」は、すでに通常業務にもどっているように見える。作業員たちは、それが毎日の自明の仕事であるかのように、淡々と、しかも和気あいあいと作業に取り組んでいるように見える。誰かがやらなければならない仕事だから、自分がやっている、という風情である。作業の内容はいずれにしろ「命がけ」である。それがそこでの仕事であり、明日も明後日もやらなければならないのであれば、淡々とやる以外にはないのかもしれない。先々2世代、40年続く作業である。こんな先のことまでは個々の作業員にはわからない。毎日が微々たる歩みである。そしてそれを一生の仕事だと考えてやるよりない。

この前線基地の建物のホールには、多くの激励文や絵が張り出されている。同行したウイーン大学のG.シュテンガー教授にも、ドイツ語で激励文を書いてもらった。係員を呼んで、張り出すという約束を取り付けた。それくらいしか貢献できることはない。それがたとえ測定誤差の範囲のような行為であっても、そうするしかないのである。

富岡町を出ると、常磐自動車道でいわきまで戻った。今回はスパリゾート・ハワイアンズで宿泊となった。硫黄と酸化鉄の臭いのする温泉ホテルであり、若者の団体客が大量に宿泊していた。温泉は浮かれるのが似つかわしい場所であり、無理にでも浮かれなければならない場所である。そのためか温泉の湯船のなかに飛び込む少年、青年がいるが、まるでプール気分のようなのである。こうした騒ぎは、人気のない帰宅困難地区とのあまりのギャップの大きさに收拾がつかないほどだが、ホテル施設もひとときの気分転換にはなる。ハワイアンのショータイムもあった。大勢の客をステージにあげて、腰の振り方をレッスンするのである。日本風にアレンジされた「胸騒ぎの腰つき」である。

スパリゾート・ハワイアンズの宿泊数は、実は震災前以上に伸びている。それだけではなく、フクシマ全県の宿泊滞在者数は、震災前以上になっているのである。復興工事のために県外から入り込んでいる人たちが多いためである。かつて観光温泉施設であったものが、現在では仕事のための宿泊施設になっている。単価はかつて一泊二食13000円程度であったものが、現在は素泊まり6000円ほどになっている例が多いという。復興関連の作業員が大量に入り込んでも、県全体の人口はやはり減っている。声も上げず居住を断念した者たちが夥しい。首都圏からのフクシマ・ツアー客も多い。不思議なことだが、こうした震災復興のプロセスがなければ、私自身も会津に行くことも磐梯山に行くことも、いわきに行くこともおそらくなかったと思われる。



スパリゾート・ハワイアンズ

良い記憶はどのようにして作られるのか。良い記憶の蓄積が、そのまま良い人生になるのであれば、つねに良い記憶を獲得する努力をしたほうが良い。いつも良い記憶をもつ練習をするのである。おそらくヘレニズム期の「快樂主義」は記憶の効用から語るべきものだったように思われる。つまり快とは良い記憶のことだと考えていくのである。それによって直接的な快、不快が焦点になるのではなく、むしろ快の記憶の蓄積が良い人生を導くのだと考えていくことになる。人間の経験の大半は、記憶に支えられている。死は感覚されないので恐れるに足りないと、エピクロスは言う。感覚の停止を死だとすれば、定義上死は感覚されない。だがそれは定義の問題である。不快な経験や苦しい経験は、やはり記憶される。そして時として難儀な思い出を作る。しかもそれは簡単には消えはしない。別様に再編されるのでなければ、そのまま維持されてしまう。そしてこの再編の能力を感覚に求めることは無理なのであろう。そこに記憶の広大な工夫の余地がある。リピーターを増やすツアーには、いったいどういう特徴があるのだろうか。

3 仮設住宅

翌朝、湯の岳パノラマライン展望台まで登ってみた。頂上近くまで車で登ることができる。南に茨城まで続く山並みが続き、北は原発の手前まで見渡すことができる。太平洋がまぶしく、風が凩いでいる。津波の被害は、4年も経てば見かけ上は穏やかな日常に組み込まれてしまう。いわき小名浜港付近は、再開発が進んで、波打ち際まで立派な施設が立ち並んでおり、港の沖合に人工の島を作り、防波堤にする計画であるらしい。海岸の堤防も修復された記念碑である。だがどのような防波堤を作ろうと、大震災規模の津波が来れば、いずれにしろ流されてしまう。ただしそれを200年に一度だと見積もれば、その年数を耐えられる人工物はほとんどないのだから、小規模の津波さえしのげばよい。自然と人為のタイムスケールの違いがあり、人間にできることは、高々自分の一生の尺度の範囲を超

えないほどのものに留まる。それでも良いのだと思い決めて、海岸沿いに「里山」を築きつつあった。里山とは、とりあえず手元にあるものを活用して、領域を形成するテーマパークのことである。



いわき里山公園

新たに人工的に制作する場所は、場所そのものに喚起力があり、かつ持続可能性を感じさせるほどの安定感があり、かつ訪れるたびに何度でも新たな経験ができるほどの内実が必要となる。海岸沿いの高台では、水と緑と光を活用できるのだから、テーマパークになる。そこにさらに工夫をこらすのである。すでに「アクアマリン福島」という水族館は、建てられて多くの来館者があった。魚の生態系を高密度で実現してくれるのだから、内容は十分である。残っているのは、アートの要素をどう組み込むかである。

いわきを後にして、郡山の駅ビルを通り越し、駅の西側にある仮設住宅を訪問した。その時点でフクシマ全県での避難者は、10万人強である。仮設住宅は、最長でも3年というふれ込みで設定されている。それがすでに4年を超え、5年目に突入している。

仮設住宅は、すでに耐用年数が過ぎ、場所によっては隙間風が吹き、雨漏りもある。誰もそうした住宅に長く住みたいわけではない。住宅横の余った土地を耕し、いくばくかの野菜を植えてみている。それで野菜が足りるわけではない。スーパーで買ったほうが安価でもある。だが何かをしなければならぬのである。何もしないでいることは、人間にとって絶望的なほど困難である。生きるということは、そうしたことなのだろう。

富岡町仮設住宅の社会福祉協議会では、その日社交ダンスの講習会を行っていた。参加者の8割は女性である。一目感心するほど上達している女性もいる。こんなとき男はつくづくひ弱なものだと思う。ひなが一日仮設住宅で暮らすのも身体に悪いので、奥さんに買い物に連れて行ってもらっているようである。生活の復興は、基本的に女主導のようである。そしておそらくそのことは避難生活でなくとも、そうなのである。

この福祉協議会は、恒常的に「笑〜る」というミニコミ誌を発行している。2015年3月段階で115

号まで発行されていた。100号までは「みでやっぺ!」という名称であった。イベント企画のアナウンスやすずで行った企画の報告を行い、共通の話題を提供して、コミュニケーションのネットワークを作ろうとしている。恒常的に「話題となりうるもの」から作り出していかなければならないのであろう。同じ場所に居住していれば、コミュニケーションが成立する、ということはあるにない。毎日のようにイベントを組み立てることができる社会福祉事務所は、ごく僅かである。ほとんど予算もない。



郡山富岡町仮設住宅

この福祉事務所の職員も富岡町の出身であり、財産も墓もそこに残っている。墓は売買のできない特殊な財産である。許可願いを出して、時々富岡町に戻り、墓参してくるようである。午前9時から3時半までの一時帰宅がゆるされるのである。富岡町の仮設住宅は、郡山といわきにある。男たちのなかには、午後にはパチンコ、夕方から飲み屋という定番スケジュールになるものもいる。戦争難民という世界規模の現象があるが、東北3県の25万人の避難者たちも、難民であることには変わりがない。働きたくても働くことができず、生活の選択肢が極端に不足している人たちである。

避難者が働けば補助金は打ち切られる。働かなければ、生活の選択肢は驚くほど少ない。なにか新たなことを開始するためには、先々の見通しが無さすぎる。ひと時の楽しみはある。不満を語ることが筋違いなほど、持って行き場がない。待てば何とかなのであれば、やはり待つことになり、待つことは生活の大切な技法でもある。だが待ってもどうにもならないこともある。自分からそこに区切りをつけることもできない。そうして4年の月日が過ぎてしまったのである。もちろん人生のなかで、4年間は短いものではない。他の時期によって置き換えが効くような年月ではない。そうした年月がじりじりと続くのである。

(視察日程 2015年3月12日-13日)